

人空羽衣遠

14

ポーランド点描新聞
日本文化再発見特集

大丈夫？日本の文化発信・情報発信 孤立したような日本

ワルシャワでケーブルテレビを契約すれば、およそ90チャンネルの中から世界各國のテレビ番組を見るのができます。ポーランドの各放送局は、もちろん、イギリスBBCやアメリカCNNやABCのほか、インドやタイの放送、アラビア語のアルジャジーラなども、見ようと思えば見ることができま

す。もちろん言葉が分かりませんが、眺めるだけでも、そこがなぜか、その中に日本の放送は一局も見当たりません。たまたま、現地局の一つ

日本映画を単発で流すくらいです。ケーブルテレビを見ながら感じるのは、国際社会の中で孤立したような日本の姿でした。当時、それはおそらく日本にとって認知度の低い国だからなのでしょう。そして、たぶん凡人には想像もつかないところで先進国日本の積極的な情報発信やPRがされてきて、この親日的な国の人々にも届いているのに違いないと思っておりました。しかし、そうではありませぬでした。

ポーランドで日本の放送が見られないわけは、ヨーロッパに駐在する日本人に有料で放送を配信するという運用が目的なのではないかと推して安くはありませぬ。ここに素朴な疑問がわいてきます。：：：JSTVは、欧州に駐在する日本人に有料で放送を配信するということですが、はたしてそのよ

ではありませぬ。日本のテレビ番組を見るには、ロンドンから配信されている衛星放送「JSTV」なるものと契約をし、専用のチューナーとパラボラアンテナを取り付ける必要がありま。日本の主要なテレビ番組を見ることが出来るのは、1チャンネル（現在は2チャンネル）だけの視聴に、入会金150ユーロ、視聴料月額50ユーロですので、決して安くはありませぬ。

うな内向きの発想だけでよいのではありませんか。各国のケーブルテレビに参入し、どこかのチャンネルで常時日本の文化発信をするという運営はできないのではありませんか。：：：好意的に理解しようとして、人の場合でも、その作られたり見たり話を聞いたりと、どこか微妙なところ、中国・東南アジアの生活文化様式と混同されているから感じることがあるからです。日本の文化が断片的にしか伝わっていないのです。その人々の責任ではありませぬ。日本の情報発信方法の問題だろうと思うので

日本の国際情報発信

日本文化に関心をもち人は世界にたくさんいます。個人的にわがわが専用のパラボラアンテナを設置してまで衛星放送を受信しようとする人は限られるでしょう。日本を正しく理解してもらうためには、いつでも手軽に情報を得ることができるといえる環境を用意することが必要だと思っております。

実は日本の国際情報発信に関する議論が始まったのは平成17年以降です。審議会「答申」では、我が国の発信力を強化して、日本の理解者とファンを増やすための施策の一つとして、「テレビ国際放送の拡充」をうたっています。その中で、国際放送の面で欧米や中国などに遅れをとっていることを認め、早急に「日本関連情報の提供を行う専門チャンネル」を設立して「受信環境を改善」する必要があります。平成19年から米国ワシントンでNHKワールドTVのケーブル放送を「試験的に」始めたことも明らかにされています。遅すぎないでしょうか。高度経済成長を成し遂げた頃には当然手がつけられていたはずなのに、最近になってようやく議論され始めたとは…。

日本から世界に

福島少佐の話に戻ります。彼が極寒のシベリアを単騎横断した第一の目的はロシアに開する情報収集と、彼自身の冒険旅行の記録を残すこと、そして、その結果、福島少佐を通して日本人の誠実さ・規律正しさなどが世界に発信されたこと、それが同時に行われたこと、近年日本文化が海外から注目され、来日外国人観光客も急増していること、本にもかかわらず、日本に正しく海外の人々に伝わっているかという点、首をかしげざるを得ないことが多いこと、事実に基づいて、情報発信が喧伝されている事実もありま。そこには私たちが日本人自身に日本文化や伝統について無知であったり無関心であったりすることが原因と考えるようなこともあるようです。情報化・国際化が加速度的に進んでいる時代だからこそ、先人たちの文化や伝統などについて正しく理解する必要があります。：：：。

明治時代の情報収集と情報発信

▼日露戦争前の明治二十六年、ベルリン駐在武官であった福島安正少佐は、ロシアの内情偵察のために単騎でシベリアを横断して帰国します。歌人の落合直文はこの壮挙をもとに『波蘭懐古』という旅情歌を書きました。「さびしき里にいでたれば、ここはいづことたづねしに、聞くもあはれやそのむかし、亡ぼされたる波蘭…。」

▼この詩が小学校唱歌として広がり、ポーランドという国名が日本で広く知られるようになったようです。ただ、この歌で描かれているポーランドは、厳しい寒さや孤独と闘いながら辺境を旅する軍人を叙情的に演出する背景でしかありません。一般の読者から見れば、この詩に描かれている「亡ぼされたる波蘭」は「淋しさ」や「哀れ」を

象徴する心象風景にすぎなかつたはず。▼同時期に編まれた福島安正校閲の『単騎遠征録』には波蘭王国の消滅に触れた部分があり、彼

がポーランドの歴史や文化について、客観的で正確な情報を持つていたことがうかがえます。▼テレビもインターネットもない時代の日本人が、当時名前すら忘れられていた異国の二百年も前の出来事を正確に把握しているのです。さらに、歴史的な事件の背景原因を分析し、自国の現状と関連づけて考えています。明治維新から二十数年しか経っていない頃のことです。

▼膨張しつつあったロシア帝国に脅威を感じていた日本の政治家や軍人にとつて、波蘭王国の滅亡は決して遠い国の話ではなかつたのです。優れた国民や精強な軍があつても、政治がそれができなければ国は滅亡する。この一文に凝縮された危機意識こそ、明治の先人たちが列強の植民地帝国主義から日本の独立を守るために抜く力の源になつたのではないかと考えます。

ポーランドの歴史や文化について、客観的で正確な情報を持つていたことがうかがえます。▼テレビもインターネットもない時代の日本人が、当時名前すら忘れられていた異国の二百年も前の出来事を正確に把握しているのです。さらに、歴史的な事件の背景原因を分析し、自国の現状と関連づけて考えています。明治維新から二十数年しか経っていない頃のことです。

福島少佐の話に戻ります。彼が極寒のシベリアを単騎横断した第一の目的はロシアに開する情報収集と、彼自身の冒険旅行の記録を残すこと、そして、その結果、福島少佐を通して日本人の誠実さ・規律正しさなどが世界に発信されたこと、それが同時に行われたこと、近年日本文化が海外から注目され、来日外国人観光客も急増していること、本にもかかわらず、日本に正しく海外の人々に伝わっているかという点、首をかしげざるを得ないことが多いこと、事実に基づいて、情報発信が喧伝されている事実もありま。そこには私たちが日本人自身に日本文化や伝統について無知であったり無関心であったりすることが原因と考えるようなこともあるようです。情報化・国際化が加速度的に進んでいる時代だからこそ、先人たちの文化や伝統などについて正しく理解する必要があります。：：：。



福島安正
ユーラシア大陸単騎横断



T.Morimoto